

二〇二四年二月二日

ホ句愉しベンチがあれば日向ぼこ  
御手洗を溢るる春の光かな  
船頭の舟唄雪の最上川  
藁葺の屋根に草萌ゆ水車かな  
ごみ拾ふ課外授業や園小春

康子  
ぼんこ  
千鶴  
康子  
やよい

二〇二四年二月一日

暖房に欠伸こらえる会議室  
落椿ティッシュに包み家苞に  
愛のチョコ見せあひて食ぶ父子かな  
ひと口に野の香ひろがる蓬餅  
垣繕はれて真青き竹香る  
凍解の深き轍や山の道  
一貧寺古し涅槃図宝とす  
定時即帰るさの空日脚伸ぶ  
節分の豆添へくれしパン屋かな  
津波禍の原野のままに冬枯るる  
そこかしこ色動きそむ芽吹き山  
裏山の鳥獣今日は涅槃図に

あひる  
かえる  
なつき  
むべ  
澄子  
みきお  
小袖  
かえる  
みきえ  
千鶴  
明日香  
うつき  
明日香

二〇二四年一月三〇日

春花壇名札代わりに種袋  
生駒峯の雲逡巡と春遠し  
微かなる雪間の土の匂ひかな  
カリヨンのゆうやけこやけ日脚伸ぶ

康子  
たか子  
みきお  
はく子

二〇二四年一月二九日

霜焼の指の体操終ひ風呂  
戻れば人影に似て枯芭蕉  
肉球の足跡しるき雪の朝  
裏山の魑魅が吹くらん虎落笛  
土手の芝萌ゆる兆しの斑かな

なつき  
むべ  
こすもす  
千鶴  
愛正

二〇二四年一月二八日

太文字で感謝と大書受験絵馬  
テノールとなる竹林の虎落笛  
雪囲ひ解けて厨に朝日射す  
句を詠めと色や香や梅の苑  
朝の日に鳥影濃ゆき冬の湖  
石垣のなぞへに健気水仙花  
大寒に拍子木響く夜の路地  
蹲に春光あそぶ日和かな

康子  
むべ  
みきお  
かえる  
隆松  
ぼんこ  
満天  
澄子

二〇二四年一月二七日

春の陽の櫛なす千本鳥居かな  
天狼の眼光山の端に届く  
群鳩の翔ちては戻る庭小春  
徳如何に溢る四温の祈願絵馬  
恋の鴨ならむ葦間の水揺れて

あひる  
むべ  
康子  
ぼんこ  
むべ

毎日句会みのる選・二〇二四年二月四日